

一人残らず都路町、双葉郡へ無事に帰っていただきたい。避難生活を最後まで支え続けたい。その一心です。



看護師 西垣 公平 さん (兵庫県丹波市出身)

震災発生直後から、いただいている数々のご支援。今回お話をうかがった看護師、西垣公平さんは、兵庫県丹波市のご出身。ご自身も阪神大震災を経験されています。

このたびの震災で被害を受けた東北地方の復興に役立ちたい一心で、勤務先の病院を退職し、日夜問わず今も避難所などで心と体のケアにあたってくださっています。

現在も双葉郡の皆さんが避難されている船引町の就業改善センターでお話をうかがいました。(インタビュー・記載内容は7月15日現在のものです)

— 阪神大震災の経験をお話いただけますか？

西垣さん(以下、西) 当時、西宮市で病院の看護助手として働いていました。仮設住宅での孤独死の

県に来ました。

— 活動先を福島県、田村市に決めた理由は？

(西) 福島県で活動したいと真っ先に考えたのは、報道で福島県が一番医療支援チームが少ないと聞いたのがきっかけです。

また、ラジオで浜通りの病院の先生が「とにかくマンパワー、人の手が足りない」と切々と訴えていたのを聞いて心が動かされました。

(独身の私が) 身動きが取りやすいのでは、病院さえ辞めさせてもらえれば、ある程度の蓄えもありましたし、お役に立てるのではと思いました。

インターネットでいろいろ検索したのですが、最後に田村市のホームページに「看護師ボランティア募集」の記事を見つけ、すぐ電話したところ、即決していただいたご縁があったんです。

— 活動を通してどんなことを感じていますか？

(西) 最初に活動した総合体育館で非常に難しさを感じたのは、やはり情報が混乱していたことです。当時160人ほど避難されていたのですが、まだカルテが2千人分以上あって…。必死でカルテを探したり、必要な薬や物資が思うように避難されている皆さんに行き届かないことも多々ありました。また、高血圧の患者さんが非常に多く、病院から処方されている薬の名前がわからなくて苦労したこともありました。4カ月が経過してもなお、避難所での生活を余儀なくされている皆さんに接しているなかで、徐々に環境も改善されつつあります。皆さんが、避難されている皆さんは、ここ最近の猛暑で体調不良を訴えられるだけでなく、精神的にも厳しい状況にあります。ですから1日でも早く、仮設住宅に移動できるようにになれば良いなと

災害ボランティアにきく - その2 -

「最大のボランティアは、皆さんです。」

「最大のボランティアは、皆さんです。」

問題など、そういう意味ではある程度復興してからが実は大変だったという思いがあります。

— その経験が災害ボランティアを始めるきっかけに？

(西) はい。発生から3カ月ぐらいいの間は福島県をはじめ全国から医療支援チームが大勢来てくれました。ある程度時間が経

思っています。

— 西垣さんの活動を支える原動力とは？

(西) 看護師の仕事には、当然ながら心のケアというものがありません。ここに避難されている皆さん全てが好き好んで避難所生活をしているわけではありませぬ。

私は田村市が本当に大好きです。美しいまちですし、大熊町も双葉町もまだ行ったことがあります。が、さぞかし美しい所なんだろうなと思っています。ですから、ぜひこの土地で皆さんが元気を取り戻せるように…。とにかく願いはその一つだけなんです。

私のブログを見て、ご自身も被災者であるにもかかわらず、ボランティアに加してくださいっている市内のかたもいます。

また、旧春山小では、避難されているかた自身が調理したおいしい食事で避難所の皆さんの健康が保たれてきました。

そして、ここ就業改善セ



過して、支援チームの皆さんが帰られてからが大変でした。病院機能が十分に回復していないのに医療を必要とする人数は減らなかつたり…。いろいろな状況をとくさん見てきましたので、私が病院を退職するときには「とにかく息長く活動してきなさい。きみを救済物資として送り出すよ」と職場の皆さんに励まされて福島

ンターでも、田村市にお世話になっている恩返しにと、避難されている皆さんが周辺の草刈りなどを積極的に行ってくださいます。避難されている皆さんは毎日毎日の生活に一生懸命です。

皆さんが元気にそれぞれのふるさとに戻っていただきたい、たとえ難しいことだとしても、きちんと自分の新しい生活拠点に健康な体で移動していただきたい。できればそれを見届けたいと思っています。

当然のことながら、生活に関するさまざまなことを避難されている皆さん自身でなさっている。言わば最大のボランティアは避難されている皆さんなんです。

ここにいる皆さんがこれだけ一生懸命やっているんだしたら、被災者の健康は誰かが徹底的に守らないといけない。

せめて、避難所から最後の1人が移動されるまでここで活動させていた

(談)

